第四十九條　證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金二十錢乃至金五十錢ノ範圍內ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之ヲ定ム但止宿料ヲ給與スル場合ニ於テハ日當ヲ給與セス

第四十九條乙　醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金三十錢乃至金五圓ノ範圍內ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之ヲ定ム

第四十九條丙　證人、醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ旅費ハ海陸路滿一里ニ付キ金五錢乃至金十錢ノ範圍內ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之ヲ定ム但通路兩線以上アル時ハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

第四十九條丁　證人、醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ止宿料ハ一日ニ付キ金二十錢乃至五十錢ノ範圍內ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之ヲ定ム但滿八里以上ノ地ヨリ來リ滯在スル時ニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十條　證人、醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ日當、旅費及止宿料ハ豫審ニ於テハ其終結前、公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條　證人日稼ヲ以テ生業トスル者「治罪法第百九十條」ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルコトアル可シ

第五十二條　鑑定、通辯又ハ翻譯等ニ付キ數多ノ時間又ハ特別ノ技能若ハ費用ヲ要スル時ハ日當ノ外別ニ相當ノ金額ヲ給與スルコトヲ得

第五十三條　裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章　賠償處分

第五十四條（削除）

第五十五條（同上）

第五十六條（同上）

第五十七條（同上）

第五十八條（同上）

第五十九條（同上）

第六十條（同上）

第六十一條　刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條　贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本人死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルコトヲ得

第六十三條　贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルコトヲ得

◎刑ノ執行猶豫ニ關スル件

（明治三十八年三月 法律第七十號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル刑ノ執行猶豫ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　左ニ記載シタル者一年以下ノ禁錮ニ處セラレタルトキハ情狀ニ因リ裁判確定ノ日ヨリ二年以上五年以下ノ期間内其ノ執行ヲ猶豫スルコトヲ得但シ監視ニ付セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

一　前ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者

二　前ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトアルモ其ノ執行ヲ終リ又ハ其ノ執行ノ免除ヲ得タル日ヨリ十年以内ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者

第二條　刑ノ執行ヲ猶豫シタル場合ニ於テハ附加刑亦其ノ執行ヲ猶豫ス但シ沒收ハ此ノ限ニ在ラス

第三條　刑ノ執行猶豫ハ裁判所ニ於テ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ刑ノ言渡ト同時ニ判決ヲ以テ之ヲ言渡スヘシ

刑ノ言渡アリタル後ニ於テハ其ノ言渡ヲ爲シタル裁判所檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ執行猶豫ノ決定ヲ爲スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ決定確定ニ至ル迄刑ノ執行ヲ停止ス

刑ノ執行ニ著手シタル者ニ付テハ其ノ執行ヲ猶豫セス

第四條　檢事ハ刑ノ執行猶豫ノ裁判ニ對シテハ刑事訴訟法ノ規定ニ從ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得

第五條　刑ノ言渡ニ對シ上訴アリタル場合ニ於テハ刑ノ執行猶豫ノ裁判ハ當然其ノ效力ヲ失フ但シ上訴裁判所ニ於テ更ニ執行ヲ猶豫スルコトヲ妨ケス

第六條　刑ノ執行猶豫ノ期間内左ニ記載シタル事由アルトキハ執行猶豫ノ裁判ヲ取消スヘシ

一　猶豫期間内ニ犯シタル罪ニ付禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

二　猶豫ノ裁判前ニ犯シタル他ノ罪ニ付禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三　猶豫ノ裁判前十年以内ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコト發覺シタルトキ

第七條　刑ノ執行猶豫ノ取消ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ於テ檢事ノ請求ニ因リ之ヲ決定スヘシ

前項ノ決定ニ對シテハ刑事訴訟法ノ規定ニ從ヒ抗告ヲ爲スコトヲ得

第八條　刑ノ執行猶豫ノ裁判取消サレタルトキハ刑期ハ其ノ決定確定ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第九條　刑ノ執行猶豫ノ裁判取消サルルコトナクシテ其ノ猶豫期間ヲ經過シタルトキハ猶豫セラレタル刑ノ執行ヲ免除ス

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

◎決鬪罪處斷方（二十二年法律第三十四號）

第一條　決鬪ヲ挑ミタル者又ハ其挑ニ應シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條　決鬪ヲ行ヒタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三條　決鬪ニ依テ人ヲ殺傷シタル者ハ刑法ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第四條　決鬪ノ立會ヲ爲シ又ハ立會ヲ爲スコトヲ約シタル者ハ證人介添人等何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

情ヲ知テ決鬪ノ場所ヲ貸與シ又ハ供用セシメタル者ハ罰前項ニ同シ

第五條　決鬪ノ挑ニ應セサルノ故ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ刑法ニ照シ誹毀ノ罪ヲ以テ論ス

第六條　前數條ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ其重キモノハ重キニ從テ處斷ス

刑法附則

違警罪即決例（明治十八年九月布告第三十一號）

明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

（別紙）

第一條　警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條　即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直ニ其言渡ヲ爲スヘシ又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡ヲ本人又其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條　即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條　即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齡身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條　正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタル日ヨリ五日内トス言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタル日ヨリ五日内トス

第六條　警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所警察官ニ送致スヘシ

刑法附則

第七條　第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條　科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條　科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條　拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出ササル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其ノ日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條　保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ沒入シテ本刑ニ換フ

第十二條　留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條　留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

刑事訴訟法

（明治二十三年十月法律第九十六號）

（沿革）（明治三十二年三月法律第七十三號ヲ以テ改正）

朕刑事訴訟法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條　公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴、私訴ノ抛棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條　私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラス公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要スル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第六條　公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一　被告人ノ死去

第二　告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ抛棄

第三　確定判決
第四　犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止
第五　大赦
第六　時效

第七條　私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス
第一　拋棄又ハ和解
第二　確定判決
第三　時效

第八條　公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス
第一　違警罪ハ六月
第二　輕罪ハ三年
第三　重罪ハ十年

第九條　私訴ノ時效ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時效ト其期間ヲ同クス
公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時效ノ例ニ從フ

第十條　公訴、私訴ノ時效ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十一條　時效ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ
時效ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期

間ヲ起算ス

第十二條　起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無效ニ屬スルトキハ時效ノ經過ヲ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無效ニ屬スルトキハ此限ニ在ラス

第十三條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得
被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ
民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得
要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十四條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡査、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十五條　此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラス但時效ノ期間ハ此限ニ在ラス
一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條　此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第十七條　此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

第十八條　訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ屆出ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條　書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條　官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ年號ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其書類ノ效ナカル可シ

第二十一條　官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ

官吏、公吏訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改氣ス可カラス若シ挿入、削除及ヒ行間外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀ミ得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載スヘシ此規定ニ背キタルトキハ其變更增減ノ效ナカル可シ

第二十一條ノ二　官吏、公吏ニ非サル者ノ署名捺印ス可キ場合ニ於テ捺印スルコト能ハサルトキハ署名ノミヲ爲シ署名スルコト能ハサルトキハ立會人ヲシテ代署セシメ捺印ノミヲ爲シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ立會人ヲシテ代署セシム可シ

立會人ハ其代署ノ事由ヲ記載シテ署名シ又ハ署名捺印ス可シ

官吏、公吏ノ面前ニ於テハ本人署名スルコト能ハサル場合ト雖モ立會人ヲ要セス官吏公吏代署シテ其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條　此法律ハ頒布前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

第二十三條　此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條　此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第十五條ノ規定ニ從フ

第二編　裁判所

第一章　裁判所ノ管轄

第二十五條　犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

管轄ヲ異ニスル數個ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對訴シアリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第二十六條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

第二十七條　數個ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第二十八條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數個ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

第二十九條　外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ內地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

關席判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最後ノ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十條　船舶內ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最後ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十一條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第三十二條　管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得

第三十三條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

第三十四條　犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判所ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ニ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十五條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ

其院ニ之ヲ爲ス可シ

大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク其申請ヲ決定スヘシ

第三十六條　被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十七條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス

第三十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ニ差出スヘシ

裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條　前條ノ申請ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

第二章　裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避

第四十條　判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一　判事被害者ナルトキ

第二　判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三　判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四　判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ

第四十一條　判事法律ニ依リ職務執行ヨリ除斥セラレタル場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

第四十二條　忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

第四十三條　忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急遽ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

第四十四條　判事自ラ第四十條ニ定メタル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申請ヲ爲ス可シ

其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ

第四十五條　本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス可シ

第三編　犯罪ノ搜査、起訴及ヒ豫審

第一章　搜査

第四十六條　檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證憑及ヒ犯罪ヲ搜査ス可シ

第四十七條　警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地內ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査ス可シ

第一　警視、警部長、警部、警部補

第二　憲兵將校、下士

第三　島司

第四　郡長

第五　林務官

第六　市長村長

第四十八條　海船內ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節　告訴及ヒ告發

第四十九條　何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外遠ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

第五十條　告訴人ハ成ル可ク其證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條　告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ此旨ヲ附

記スル可シ

第五十二條　官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條　何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十一條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條　告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其效アリトス

第五十五條　告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトナカル可シ

第二節　現行犯罪

第五十六條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第五十七條　重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ準ス

第一　犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルルトキ

第二　兇器贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三　家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕ス

爲メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

第五十八條　司法警察官及ヒ巡査、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

第五十九條　巡査、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條　何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條　前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引渡ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章　起訴

第六十二條　地方裁判所檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

第一　重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

第二　輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁

判所ニ訴ヲ爲ス可シ

第三　裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可シ

區裁判所檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタル上裁判所構成法第十六條第一號第二號ニ記載シタル事件ト思料シタルトキハ其裁判所ニ訴ヲ爲ス可シ

第六十三條　檢事ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第六十五條　前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第六十六條　檢事豫審ヲ求ムルトキハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第三章　豫審

第六十七條　現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第六十八條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記錄ヲ檢閲スルコトヲ得但二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

又必用ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節　令狀

第六十九條　豫審判事ハ檢事ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第七十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地內ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第七十一條　豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第七十二條　豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第一　被告人定リタル住所アラサルトキ

第二　被告人聖證ヲ煙滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ

第三　被告人未遂罪又ハ脅迫ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アルトキ

第七十三條　拘引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

拘引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時內ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキハ拘留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第七十四條　豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又ハ拘引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ

訊問スルコトヲ得

第七十五條　拘留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス但被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ爲サスシテ之ヲ發スルコトヲ得

第七十六條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ拘引狀、拘留狀ハ巡査、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム

第七十七條　拘引狀、拘留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査、憲兵卒數人ニ分付スルコトアル可シ

拘引狀、拘留狀ヲ執行スルニハ其正本ヲ携帶シ被告人ノ請求アル時ハ之ヲ示ス可シ

拘引狀、拘留狀ヲ執行シタルトキハ其正本ニ執行ノ場所及ヒ日時ヲ記載シ若シ執行スルコト能ハサルトキハ其事由ヲ記載シテ署名捺印ス可シ

巡査、憲兵卒ハ令狀ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出ス可シ

第七十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ捜索ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス捜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅捜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店、割烹店其他夜間ト雖モ衆人ノ出入スル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限リ何時ニテモ捜索ヲ爲スコトヲ得

第七十九條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルコトヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料スル場合ニ於テ被告事件急迫ヲ要スルトキハ巡査、憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡査、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ發シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第八十條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ各檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲シ可キコトヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜索及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

此場合ニ於テ檢事ノ發シタル　捕狀ハ拘留狀ト同一ノ效ヲ有ス

第八十一條　豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示ス可シ其長官又ハ隊長ニ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ遠ニ令狀ニ應セシム可シ

第八十二條　拘留狀ヲ受ケタル被告人ハ遠ニ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第八十三條　（削除）

第八十四條　在監中ノ被告人ニ對シ發シタル拘留狀ハ司獄官吏ヲシテ之ヲ執行セシム

拘留狀執行ニ關シテハ第七十七條ノ規定ヲ適用ス

第八十五條　拘留ヲ受ケタル被告人ハ官吏ノ立會ニ依リ他人ト接見スルコトヲ得
書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經タル後他人ト之ヲ授受スルコトヲ得
豫審判事ハ必要ナリト思料シタルトキハ被告人ノ監房ヲ別異シ他人トノ接見書類物件ノ授受ヲ禁シ又ハ其書類ヲ差押フルコトヲ得

第八十六條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ取消ス可シ

第二節　（削除）

第八十七條　（削除）

第八十八條　（同上）

第八十九條　（同上）

第三節　證據

第九十條　被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ懲憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

第九十一條　豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據懲憑ヲ集取ス可シ

第九十二條　豫審判事、臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ
裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス
但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節　被告人訊問及ヒ對質

第九十三條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急遽ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第九十四條　豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユ可カラス

第九十五條　裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ
豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十六條　被告人其供述ニ付キ變更增減ス可キコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第九十七條　被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第九十八條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト、其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

第九十九條　書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ
第九十五條第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百條　被告人又ハ對質人彈ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシ

ムル若シ聾者啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ

第百一條　被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ

通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百三十六條第百三十七條第百四十一條ノ規定ハ本條ニモ之ヲ適用ス

第五節　檢證、捜索及ヒ物件差押

第百二條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第百三條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法、日時、場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第百四條　豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ捜索ヲ爲スコトヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス

第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百五條　豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ捜索ヲ爲スコトヲ得

第百六條　豫審判事ハ臨檢、捜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但物件ヲ監護シ又ハ遞送サ

ルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

第百七條　豫審判事ハ臨檢、捜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第百八條　被告人ハ臨檢捜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

第百九條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百十條　豫審判事ハ臨檢、捜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第百十一條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第百十二條　豫審判事ハ其管轄地內ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、捜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

第百十三條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審判事ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

第百十四條　證書ニ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默祕スヲ可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得

第六節　證人訊問

第百十五條　證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記ス可シ又出頭ノ日時、場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且拘引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百十六條　證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百十七條　證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百十八條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又拘引狀

ヲ發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍籍ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其拘引ニ付テモ亦同シ

第百十九條　豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日內ニ其出頭セサリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第百二十條　證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ疏明ス可シ

第百二十一條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齡、職業、住所及ヒ第百二十三條ニ記載シタル者ナキヤ否ヤヲ問フ可シ

第百二十二條　豫審判事ハ證人ナシテ眞心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默祕セス又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百二十三條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一　民事原告人

第二　民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻旋ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三　民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受タル者

第四　民事原告人及ヒ被告人ノ屋人又ハ同居人

第百二十四條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一　十六歳未滿ノ幼者

第二　知覺精心ノ不十分ナル者

第三　瘖啞者

第四　公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五　重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六　現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百二十五條　左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一　官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默祕ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二　醫師藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶、其身分、職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リ知リタル事實ニシテ默祕ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絶ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

第百二十六條　證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事傾聽ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ屬託シテ之ヲ爲ス可シ

第百二十七條　證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百二十八條　豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

第百二十九條　第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百三十條　皇族證人トナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滯在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滯在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

第百三十一條　豫審判事ハ證人ニ其供述ト相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其供述ヲ變更增減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百三十二條　豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ

囑託スルコトヲ得

第百三十三條　第百十八條第百十九條及ヒ第百二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

第百三十四條　證人ハ出頭ニ付テノ旅費、日當ヲ要ムルコトヲ得

第七節　鑑定

第百三十五條　豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第百三十六條　鑑定ニ付テハ第百十五條第百十八條乃至第百二十一條第百二十三條乃至第百二十五條及ヒ第百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第百條第百一條ノ規定ハ鑑定人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百三十七條　鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百二十二條ノ式ニ從フ

第百三十八條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十八條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第百三十九條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第百四十條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百四十一條　鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得

第八節　現行犯ノ豫審

第百四十二條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第百四十三條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ遠ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ其繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第百四十四條　地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

第百四十五條　前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ遠ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

第百四十六條　區裁判所檢事裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ第百四十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得若シ被告人ニ對シ拘留狀ヲ發シタルトキハ三日內ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第百四十七條　第百四十四條第百四十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但拘留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ遠ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

第百四十八條　地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ拘留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ前項ノ手續ヲ爲ス可シ

第百四十九條　地方裁判所檢事ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ拘留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第九節　保釋

第百五十條　豫審判事ハ豫審中拘留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第百五十一條　保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

第百五十二條　保釋ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價證券ヲ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地內ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第百五十三條　保釋中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時間前ニ報知ヲ爲ス可シ

第百五十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

第百五十五條　保證金ヲ沒收スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

第百五十六條　豫審判事保證ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第百五十七條　豫審判事保釋金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

第百五十八條　豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保證金ヲ還付ス可シ

第百五十八條ノ二　保釋ヲ許ササル言渡ニ對シテハ其裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其許否ヲ決定ス可シ

第百五十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシムヘキ證書ヲ差出サシムヘシ

第百六十條　責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消ス可シ

第十節　豫審終結

第百六十一條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記錄ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟記錄ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第百六十二條　檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルトキハ檢事ハ訴訟記錄ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第百六十三條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第百六十四條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ拘留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免許ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一　犯罪ノ證據十分ナラサルトキ

第二　被告事件罪ト爲ラサルトキ

第三　公訴ノ時效ニ罹リタルトキ

第四　確定判決ヲ經タルトキ

第五　大赦アリタルトキ

第六　法律ニ於テ其罪ヲ免スルトキ

第百六十六條　被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第百六十七條　被告事件裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪ノ判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得若シ被告人未タ拘留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第百六十八條　被告事件重罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルトキハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ拘留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發ス可シ

第百六十九條　豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留ス可キトキハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト、公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其原由又犯罪ノ證憑十分ナラサルトキハ其旨ヲ明示ス可シ

區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質、模樣、證憑ノ十分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第百七十條　前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示スヘシ

第百七十一條　豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第百七十二條　檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又ハ免訴若クハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

第百七十三條　重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被告人ニ送達スヘキ決定ニハ其決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載スヘシ其記載ナキトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定ノ送達アルマテ抗告期間ノ經過ヲ停止ス

第百七十四條　豫審終結ノ決定ハ抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ停止ス但保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決定ハ其執行ヲ停止セス

第百七十五條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證憑アルトキハ此限ニ在ラス

新ナル證憑アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

第四編　公判

第一章　通則

第百七十六條　公判ハ判事、檢事、裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス

第百七十七條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

第百七十八條　裁判長ハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

裁判所ハ被告人ヲ訊問シタル後何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第百七十九條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得

辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タルトキハ辯護士ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第百七十九條ノ二　左ノ場合ニ於テ被告人自ラ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ辯護人ヲ付スルコトヲ得

第一　被告人十五歲未滿ナルトキ

第二　被告人婦女ナルトキ
第三　被告人聾者又ハ啞者ナルトキ
第四　被告人精神病ニ罹リ又ハ意識不十分ノ疑アルトキ
第五　被告事件ノ模様ニ因リ裁判所ニ於テ辯護人ヲ必要ナリトスルトキ

前項ノ辯護人ハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬辯護士中ヨリ選任ス可シ但辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得

第百八十條　辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記錄ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

第百八十一條　被告人ノ法律上代理人ハ其補佐人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得

第百八十二條　被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セサルトキハ對席トシテ裁判ヲ爲ス可シ

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退廷又ハ拘留ヲ命セラレタルトキ亦同シ若シ辯論二日ニ渉ルトキハ更ニ被告人ヲ出頭セシム可シ

第百八十三條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ在ラス辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲ス可シ

第百八十四條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第百八十五條　左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

第一　同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ
第二　數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタルトキ
第三　自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルル爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ

第百八十六條　檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ニ問ハス本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

第百八十七條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ判決ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第百八十八條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

第百八十九條　豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ、證人、鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第百九十條　第百十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第百九十一條　證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

第百九十二條　檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

第百九十三條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又供述前辯論ニ立會フ可カラス既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第百九十四條　證人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス

陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第百九十五條　證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致ス可シ

其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第百九十六條　被告人聾者、啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第百條第百一條ノ規

定ニ從フ

第百九十七條　裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十八條　裁判長ハ各證人ノ取調終ハリタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ

第百九十九條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

第二百條　裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

第二百一條　被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲ス可シ

免許又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス

私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二百二條　被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第二百三條　刑ノ言渡ヲ爲スニハ罪トナル可キ事實及ヒ證據ニ依リテ之ヲ認メタル理由ヲ明示シ且法律ヲ適用シ其理由ヲ付ス可シ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ

第二百四條　判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ

判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百五條　判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官氏名ヲ記載シ判事裁判所書記共ニ署名捺印ス可シ

第二百六條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第二百七條　對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知シ又闕席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス

第二百八條　裁判所書記ハ公判始末書ヲ作リ左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

第一　公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ禁シタルコト及ヒ其事由

第二　被告人ノ訊問及ヒ其供述

第三　證人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲ササルトキハ其事由

第四　證據物件

第五　辯論中異議ノ申立アリタルコト其申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及ヒ

第六　辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルコト

第二百九條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シ

辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ此旨ヲ記載ス可シ

第二百十條　公判始末書ハ判判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可シ

第二百十一條　判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴訟記錄ニ添付シ其裁判所ニ保存ス可シ上訴アリタルトキハ之ヲ上等裁判ニ送付ス可シ

第二章　區裁判所公判

第二百十二條　區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス

第一　檢事ノ起訴アリタルトキ

第二　豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ

第二百十三條　檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シ

裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシム可シ

第二百十四條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名、職業、住所、出頭ノ日時、場所及ヒ被告事件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭セシムルコトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ

若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサリシトキハ、辯護準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第二百十五條　呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百十六條　判事ハ猶豫ヲ經サル被告事件急遽ヲ要スルトキハ公判ニ取掛ル前檢證處ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス

第二百十七條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ又呼出ヲ受ケスシテ出頭シタル者ト雖モ異議ノ申立ナキトキハ裁判所ニ於テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得

第二百十八條　判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齡、身分、職業、住所、出生ノ地ヲ問フ可シ檢事ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第二百十九條　被告事件ニ付キ被告ヲ訊問ス可シ

必要ナル調書其他證憑書類ハ書記ヲシテ朗讀セシメ又證人ノ供述ヲ聽キ其他證憑ノ取調ヲ爲ス可シ

若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、民事原告人ノ異議ナキトキハ他ノ證憑ヲ取調フルニ及ハス

第二百二十條　證憑調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得

檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ供述セシム可シ

第二百二十一條　公訴ニ付キ辯論終リタル後民事原告人ハ被害ノ事實ヲ證明シ且私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ

被告人、辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得

第二百二十二條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

若シ被告人拘留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ拘留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前拘留狀ヲ存シ又ハ新ニ拘留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十三條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ證憑十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十四條　犯罪ノ證憑十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第百六十五條第三號以下ノ場合ニ於テ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十五條　前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付キ其請求價額ノ多寡ニ拘ハラス判決ヲ爲ス可シ

第二百二十六條　呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百二十七條　禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ非サレハ闕席判決ヲ爲ス可カラス

豫審終結ノ言渡又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親屬又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ一月間裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ告知ス可シ

第二百二十八條　闕席判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席者ニ送達ス可シ

闕席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ得

第二百二十九條　故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マル禁錮ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第二百三十條　故障ヲ申立テントスル者ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可シ

第二百三十一條　裁判所ニテハ故障ノ申立アリタルコトヲ相手方ニ通知シ且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟關係人ヲ呼出ス可シ

第二百三十二條　裁判所ニテハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又故障ノ期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ

第二百三十三條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

前項ノ場合ニ於テ故障申立人闕席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百三十四條　第二百四十七條第二百四十八條ノ規定ハ闕席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ準用ス

第三章　地方裁判所公判

第二百三十五條　地方裁判所ニ於テハ豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪ノ公訴ヲ受理ス

又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受理ス

第二百三十六條　前章ノ規定ハ此章ニ別段ノ定ナキモノニ限リ地方裁判所ノ輕罪、重罪ノ公判ニ適用ス

第二百三十七條　重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任スルヤ否ヤヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ異議ナキトキハ辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ

第二百三十八條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百三十九條　裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ自白シタルトキト雖モ仍ホ證憑ヲ取調ヘサル可カラス

第二百四十條　裁判所ニ於テハ被告事件區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト認メタルトキト雖モ第一審判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ其請求ノ價額通常民事上區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキ亦同シ

第二百四十一條　裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ檢事ヨリ更ニ其事件ヲ重罪トシテ訴追スルコトヲ申立タルトキハ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケサルトキハ拘留狀ヲ發ス可シ

其被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第五編　上訴

第一章　通則

第二百四十二條　檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ許シタル上訴ヲ爲スコトヲ得

檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メニモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得

第二百四十三條　辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ノ明言シタル意思ニ反スルコトヲ得ス

第二百四十四條　被告人ノ法律上代理人ハ獨立シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

第二百四十五條　拘留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ監獄署長ニ差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ

第二百四十六條　檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決アルマテ何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得

第二百四十七條　訴訟關係人天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ疏明シタルトキハ期間ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間内ニ其疏明方法ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲ス可シ

第二百四十八條　前條ノ申立アリタルトキハ裁判所書記遲ニ其申立書ヲ相手方ニ送達ス可シ相手方ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ先ツ其申立ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

第二百四十九條　上訴完結ノ後其訴訟記錄ハ上訴審ニ於テ爲シタル裁判ノ謄本ト供ニ第一審裁判所ニ之ヲ返還ス可シ

第二章　控訴

第二百五十條　控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第百八十七條ニ規定シ本案タル前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十一條　控訴ハ判決ノ一分ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得若シ之ヲ限ラサルトキハ判決ノ全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノト看做ス可シ

第二百五十二條　控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日トス

闕席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間内故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條　本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間内及ヒ控訴アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停止ス

第二百五十四條　控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

裁判所ハ控訴ノ申立アリタルトキハ速ニ相手方ニ通知ス可シ

第二百五十五條　原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル控訴ノ申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却

ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十六條　訴訟記錄ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタルトキハ檢事ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監獄ニ移ス可シ

第二百五十七條　控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百五十八條　控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス

第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリトセサルトキハ之ヲ呼出ササルコトヲ得

第二百五十九條　控訴ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

控訴裁判所ノ檢事モ亦附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百六十條　控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間内ニ於テ申立ナ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期限ノ經過後ニ係ルモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

第二百六十一條　控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ控訴ヲ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲ス可シ

第二百六十二條　控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ拘留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前拘留狀ヲ存シ又ハ新ニ拘留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ付ス可シ

原裁判所ニ於テ不當ニ管轄違ヲ言渡シタルトキハ其判決ヲ取消シ事件ヲ其裁判所ニ差

戻ス可シ

第二百六十三條　前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一審トシテ裁判權ヲ有スルトキハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

第二百六十四條　控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セサルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

第二百六十五條　被告人、辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲ス一コトヲ許サス

被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

第二百六十六條　控訴申立人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セサルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

第三章　上告

第二百六十七條　上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第百八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十八條　上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲

スコトヲ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第二百六十九條　裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一　規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ

第二　法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判決裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得

第三　判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラス裁判ニ參與シタルトキ

第四　裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五　法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルトキ

第六　法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カサルトキ

第七　裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ

第八　判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセサルトキ

第九　裁判ニ理由ヲ付セス又ハ理由ノ齟齬アルトキ

第十　擬律ノ錯誤アルトキ

第二百七十條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第二百七十一條　上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

第二百七十二條　本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告ノ申立アリタルトキハ抑留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

第二百七十三條　上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタル日ヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百七十四條　相手方ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタル日ヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得

裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第二百七十五條　檢事ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ上告裁判所ニ差出シ一通ヲ相手方ニ送達ス可シ

私訴ノ判決ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第二百七十六條　原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル上告ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十七條　訴訟記錄ハ檢事ヨリ上告裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

第二百七十八條　上告ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

上告裁判所ノ檢事モ亦附帶上告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十九條　上告申立人及ヒ相手方ハ辯護士ヲ差出スコトヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キモノトシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ辯護士ヲ選任セサルトキハ上告裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第二百八十條　裁判長ハ受命判事ヲ定ム可シ受命判事ハ訴訟記錄ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

第二百八十一條　上告申立人及ヒ相手方ハ受命判事ノ報告書ヲ差出スマテハ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得

受命判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルトキハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第二百八十二條　裁判所書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ノ辯護士ニ報知ス可シ

第二百八十三條　開廷ノ日ニハ受命判事先ツ其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事及ヒ辯護士ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第二百八十四條　上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出ササルトキハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十五條　上告裁判所ニ於テハ上告ノ理由ナキトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間内ニ於テ起ササルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

第二百八十六條　上告ヲ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可シ但後二條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二百八十七條　擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十八條　公判ノ手續規定ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク其手續ヲ破毀ス可シ

第二百八十九條　判決ノ一分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アルトキハ其部分ヲモ破毀ス可シ

擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ被告人ノ利益ノ爲メニ判決ヲ破毀シタルトキハ其利益ハ上告ヲ爲ササル共同被告人ニモ及ホス可シ

第二百九十條　上告裁判所ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可キトキハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所ノ民事部ニ移ス可シ

第二百九十一條　第二百六十五條ノ規定ハ上告ニモ亦之ヲ準用ス

第二百九十二條　第一審裁判所ト第二審裁判所トヲ問ハス法律ニ於テ關セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ期間内ニ上訴スル者ナクシテ其判決ヲ確定シタルトキハ其事件ニ付キ上告ヲ受クル權アル裁判所ノ檢事ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ其裁判所ニ非常上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ破毀シ直チニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ

第四章　抗告

第二百九十三條　抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十四條　抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス可シ

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告申立人ヨリ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十五條　抗告ノ期間ハ裁判ノ送達アリタル日ヨリ三日トス

第二百九十六條　抗告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所又ハ豫審判事ニ差出ス可シ其裁判所又ハ豫審判事ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理更ナシトスルトキハ意見ヲ付シテ三日内ニ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付テハ訴訟記錄ヲモ送致ス可シ

第二百九十七條　抗告裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ書類ニ依リ抗告ノ對判ヲ爲ス可シ

第二百九十八條　豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付キ抗告裁判所ニ於テ必要ナリトスルトキハ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第二百九十九條　抗告裁判所ニ於テハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又抗告ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ闕クトキハ其抗告ヲ棄却ス可シ

第三百條　抗告裁判所ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又抗告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第六編　再審

第三百一條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一　人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタルモ其殺サレタリト認メラレシ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル確證アリタルトキ

第二　同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三　犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ

第四　被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五　公正證書ヲ以テ訴訟記錄ニ僞造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六　判決ノ證據ト爲リタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキ

第三百二條　再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

第一　別ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事

第二　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事

第三　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

第四　刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五　刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

第三百三條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣旨書ニ原判決ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事及ヒ控訴裁判所ノ檢事自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスルトキハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第三百五條　上告裁判所ニ於テハ檢事ノ請求ニ因リ速ニ受命判事一名ヲシテ其取調ヲ爲

シ報告ヲ爲サシム可シ

第三百六條　上告裁判所ニ於テハ受命判事ノ報告及ヒ檢事ノ意見ヲ聽キ判決ヲ爲ス可シ

第三百七條　上告裁判所ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第三百八條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ上告裁判所ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原判決ヲ破毀ス可シ

第三百九條　再審ノ判決ニ因リ無罪ノ言渡アリタルトキ又ハ前條ノ場合ノ於テ破毀ノ言渡アリタルトキハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其判決ヲ掲示ス可シ

第七編　大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

第三百十條　裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其捜査ヲ爲ス可シ

地方裁判所區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ捜査ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ

第三百十一條　前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急遽ヲ要スルトキハ地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第百四十四條及ヒ第百四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

第三百十二條　前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ遽ニ之ヲ檢事總長ニ送致ス可シ

第三百十三條　檢事總長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴ス

可キモノト認メタルトキハ豫審判決ヲ命ス可キコトヲ大審院長ニ請求ス可シ

第三百十四條　大審院長ヨリ命ヲ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ訴訟記錄ニ意見ヲ付シ大審院ニ差出ス可シ

第三百十五條　大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ裁判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定シ其事件ヲ送致ス可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百十六條　前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除ク外豫審、公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス

第八編　裁判執行復權及ヒ特赦

第一章　裁判執行

第三百十七條　刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十八條　死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記錄ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第三百十九條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行ス可シ

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ遁レタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ拘留狀ト同一ノ効ヲ有ス其闕席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタル者亦同シ

第三百二十條　刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金、科料、訴訟費用及ヒ沒收物品、追徵金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ

第三百二十一條　死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百二十二條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定スヘシ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十三條　賠償及ヒ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二章　復　權

第三百二十四條　復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期間經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法大臣ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ハ現ニ住スル地ノ地方裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第三百二十五條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

第一　判決正本

第二　主刑ノ滿期、特赦ト爲リ又ハ時効ノ成就シタルコトヲ證明スル書類

第三　假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタル證書

第四　賠償及ヒ訴訟費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタル證書

第五　過去、現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第三百二十六條　檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ書シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ檢事長ニ差出ス可シ

第三百二十七條　檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第三百二十八條　司法大臣ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ之ニ意見書ヲ添ヘ速ニ上奏ス可シ

第三百二十九條　勅裁ニ因リ復權ノ願ヲ却下シタルトキハ司法大臣ヨリ其旨ヲ檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期間ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從フ

第三百三十條　復權ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ其裁可狀ヲ檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ヘ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ判決ノ原本ニ記入ス可シ

第三章　特　赦

第三百三十一條　特赦ハ刑ノ言渡ヲ確定シタル後何時ニテモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事又ハ監獄署長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法大臣ニ申立ルコトヲ得

監獄署長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ストキハ檢事ヲ經由ス可シ但檢事ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタルトキハ司法大臣ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第三百三十二條　司法大臣ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申渡ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第三百三十三條　特赦ノ申立却下アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三百三十四條　特赦ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第三百三十三條ノ規定ニ從フ

附則

第一條　此法律施行前ニ受理シタル豫審ノ故障及ヒ其故障ノ判決ニ對スル上告ハ之ヲ受理シタル地方裁判所又ハ大審院ニ於テ抗告トシテ之ヲ裁判ス可シ

第二條　大審院ニ於テ既ニ受理シタル哀訴裁判管轄ヲ定ムルノ訴及ヒ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ治罪法ノ手續ニ依リ大審院之ヲ裁判ス可シ

第三條　既ニ發シタル拘留狀收監此狀ハ法律ニ定メタル拘留狀ノ效ヲ有ス

第四條　此法律ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第五條　此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行シ其日ヨリ治罪法ヲ廢ス

刑事訴訟法終

監獄

◎監獄則

明治二十二年七月
勅令第九十三號

（沿革）二十八年勅令第百號ヲ以テ改正、三十一年六月同第百四號改正、三十二年勅令第三四四號ヲ以テ第六條第七條改正、第八條中加除第十七條改正、第十八條ニ二項追加第二十二條改正、第二十三條中削除、第二十六條乃至第三十條改正、第三十一條中追加、第三十二條中改正正削、第三十三條第三十五條一項第三十七條改正、第三十八條中追加、第三十九條中削除、第四十二條一項二號三號及第四十三條一項中第二號改正、第四十八號中削除、三十三年勅令第百七十二號改正、三十六年勅令第三十七號改正

朕監獄則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

監獄則

第一條　監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一　集治監　徒刑流刑及舊法懲役終身ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

二　假留監　徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治監ニ發遣スル迄拘禁スル所トス

三　地方監獄　拘留禁錮獄懲役ニ處セラレタル者及婦女ニシテ徒刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

四　拘置監　刑事被告人ヲ拘禁スル所トス

五　留置場　刑事被告人ヲ一時留置スル所トス但警察署內ノ留置場ニ於テハ罰金ヲ

禁錮ニ換フル者及拘留ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルコトヲ得

六　懲治場　不論罪ニ係ル幼者及瘖啞者ヲ懲治スル所トス

第二條　（削除）

第三條　（削除）

第四條　内務大臣ハ隨時監獄巡閲官ヲシテ各監獄ヲ巡閲セシムヘシ

警視總監北海道廳長官府縣知事（東京府ヲ除ク）ハ毎年少クトモ一回所轄ノ監獄ヲ巡閲スヘシ

裁判官ハ時々其裁判所管轄内ニ在ル拘置監ヲ巡視スヘシ

檢察官ハ時々其裁判所管轄内ニ在ル監獄ヲ巡視スヘシ

第五條　（削除）

第六條　新ニ入監スル者アルトキハ令狀宣告書執行指揮書其ノ他適法ノ文書ヲ査閲シタル後入監セシムヘシ

第七條　在監ノ婦女其子ヲ乳養セント請フトキハ其ノ齢滿一歳ニ至ル迄之ヲ許スコトヲ得

第八條　新ニ入監スル者ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ之ヲ領置スヘシ

但シ監獄則施行細則ニ依リ處分スルハ此ノ限ニアラス

第九條　水火風震等非常ノ變災ニ際シ監獄圍内ニ於テ避災ノ手段ナシト考定スルトキハ典獄ハ其狀況ニ依リ在監ノ囚人懲治人及刑事被告人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避ケシムヘシ若シ押送スルノ遑ナキトキハ一時之ヲ解放スルコトヲ得

解放ニ遭ヒタル者ハ其時ヨリ二十四時以内ニ監獄又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

第十條　滿期ノ者ヲ解放スルハ其滿期ノ翌日午前十時ヲ過クヘカラス

第十一條　囚人ハ各罪質ニ從テ殿ニ其監房ヲ別異シ其中ニ就キ年齢ニ從ヒ左ノ如ク別異ス

一　滿十二歳以上十六歳未滿ノ者

二　滿十六歳以上二十歳未滿ノ者

三　滿二十歳以上ノ者

四　滿十六歳以上二十歳未滿再犯ノ者

五　滿二十歳以上再犯ノ者

第十二條　懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

一　滿八歳以上十六歳未滿ノ者

二　滿十六歳以上二十歳未滿ノ者

三　滿二十歳以上ノ者

第十三條　刑事被告人ハ各罪質ニ從テ其監房ヲ別異シ其中ニ就キ年齢ニ從ヒ左ノ如ク別異ス

一　滿十二歳以上十六歳未滿ノ者

二　滿十六歳以上二十歳未滿ノ者

三　滿二十歳以上ノ者

第十四條　地方監獄拘置監懲治場ノ一區畫内ニ在ル者ハ墻壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第十五條　凡ソ監獄ハ男監女監ノ別ヲ殿隔スヘシ

第十六條　囚人及刑事被告人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ男ト女トヲ分チ時宜ニ

依リ戒具ヲ用フルコトヲ得但懲治人ニハ戒具ヲ用ヒス

第十七條　定役囚ノ作業ハ刑名罪質年齢技能將來ノ生計等ヲ斟酌シ各自ノ體力ニ應シテ之ヲ課ス

第十八條　左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス

一月一日二日　元始祭
孝明天皇祭　紀元節
春季皇靈祭　神武天皇祭
秋季皇靈祭　神嘗祭
天長節　新嘗祭
十二月三十一日

父母ノ喪ニ遭フ者ハ三日免役ス

前二項ノ外內務大臣ノ認可ヲ得テ臨時服役ヲ免スルコトヲ得

炊事洒掃其ノ他監獄ノ必要ニ因リ使役スル者ハ免役セシメサルコトヲ得

第十九條　無定役囚ニシテ監獄園內ニ於テ自ラ作業ヲ爲サント請フトキハ之ヲ許シ作業ノ種類ハ典獄之ヲ指定ス刑事被告人モ亦之ニ準スルコトヲ得

第二十條　懲治人ニハ每日五時以上農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

第二十一條　役場ハ男女ノ別ヲ嚴隔シ仍ホ定役囚無定役囚懲治人ノ役場ハ各別ニ之ヲ設ケ其中ニ就キ丁年以上ノ者ト未丁年者トヲ區別スヘシ

第二十二條　定役囚現役一百日ヲ經タルトキハ重罪囚ニハ其ノ工錢ノ十分ノ一乃至五輕罪囚ニハ十分ノ二乃至六ヲ給ス

無定役囚懲治人及刑事被告人ニシテ作業スル者ニハ其ノ工錢ノ十分ノ七ヲ給ス

第二十三條　前條ニ依リ作業者ニ與フヘキ工錢ハ之ヲ領置スヘシ

第二十四條　囚人懲治人及刑事被告人逃走シ監署ニ貨物アルトキハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經テ之ヲ受クヘキ者ナキトキハ監獄慈惠ノ用ニ充ツ刑死者死亡者ノ領置貨物ニシテ受クヘキ者ナキトキモ亦同シ

第二十五條　囚人及懲治人監署ニ領置ノ貨物ヲ以テ其父母養子妻子ノ扶助及正當ノ費用ニ充ント請フトキハ典獄其事情取糺シテ之ヲ許可スヘシ

刑事被告人ニ係ルトキハ當該裁判官ノ允許ヲ經ヘシ

第二十六條　囚人ニハ一定ノ衣類臥具ヲ著用セシム但シ拘留囚ハ自衣ヲ著スルコトヲ得

第二十七條　懲治人刑事被告人ノ衣類臥具ハ總テ自濟トシ其ノ種類品數等ハ典獄之ヲ指定ス但シ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第二十八條　囚人懲治人及刑事被告人ニハ各自ノ身體作業等ヲ斟酌シ左ノ糧食ヲ給スヘシ

一　下白米十分ノ四　麥十分ノ六　一人一回三合以下
一　菜　一人一日三錢以下

地方狀況又ハ在監人ノ體質等ニ依リ內務大臣ノ認可ヲ得テ前項ノ糧食ヲ變更スルコトヲ得

懲治人刑事被告人ニシテ糧食ヲ自辨セント請フトキハ之ヲ許ス

第二十九條　囚人懲治人及刑事被告人ノ頭髮鬚髯ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ之ヲ短縮剃除セシム

第三十條　囚人及懲治人ニハ教誨ヲ施スヘシ

刑事被告人ニシテ教誨ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第三十一條　囚人十六歳未滿ノ者及懲治人ニハ毎日四時以内讀書習字算術等ヲ教フヘシ

第三十二條　囚人懲治人及刑事被告人現行ノ法律命令書ヲ看ント請フトキハ之ヲ許ス

囚人及懲治人中書籍ノ看讀ヲ請フ者アルトキハ感化若ハ紀律ニ妨ケナシト認メタルモノニ限リ之ヲ許ス

刑事被告人書籍ヲ看ント請フトキハ總テ之ヲ許ス但領置外ノ書籍ハ當該裁判官ノ承認ヲ經ヘキモノトス

第三十三條　囚人ノ發スル信書ハ一箇月一通トス但シ典獄ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニアラス

第三十四條　囚人及懲治人ノ發スル信書又ハ外人ヨリ送リ來ル信書ハ典獄之ヲ檢閲スヘシ若シ書中不正不良ニ渉リ又ハ改悛ヲ妨クルモノト認ムルトキハ之ヲ發贈付與スルコトヲ許サス但刑事被告人ニ係ル信書ハ總テ當該裁判官ノ檢閲ヲ經ヘキモノトス

第三十五條　囚人懲治人及刑事被告人ニ接見セント請フ者アルトキハ監獄官吏ノ立會ヲ以テ之ヲ許ス但シ形跡ノ疑フヘキコトアリト認ムルトキハ之ヲ許ササルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタル者ハ裁判言渡アル迄辯護人ヲ除クノ外其現在地ノ裁判所長ノ允許ヲ受クヘキ密室監禁者ハ當該裁判官ノ允許ヲ受クヘシ

第三十六條　囚人懲治人及刑事被告人疾病ニ罹ルトキハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第三十七條　囚人懲治人及刑事被告人死亡シタルトキハ典獄ハ看守長醫師ノ立會ヲ以テ之ヲ檢視スヘシ

刑死者ハ死相ヲ檢シタル後仍五分時ヲ過キサレハ其ノ遺骸ヲ絞架ヨリ解下スルコトヲ許サス

親屬若クハ故舊ニシテ遺骸ヲ請フ者アルトキハ之ヲ下付ス但シ死亡二十四時以内ニ在テ其ノ下付ヲ請フ者ナキトキハ監者ニ於テ之ヲ假葬スヘシ

傳染病豫防上必要アルトキハ監署ニ於テ之ヲ假葬スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ親屬若クハ故舊ニシテ遺骨ノ下付ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第三十八條　懲治人及刑事被告人ニ其親　故舊ヨリ書類書籍用紙衣服臥具其他必要ノ物品又ハ飲食物ヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許スコトヲ得但書類書籍ハ當該裁判官ノ檢閲ヲ受クヘシ其密室監禁者ニ係ルトキハ他物ニ於テモ亦同シ

ルモノハ前項ノ例ニアラス

第三十九條　囚人ニハ現行ノ法律命令書並ニ書籍用印紙郵便切手貨幣及内務大臣ニ於テ許可シタルモノヲ除クノ外差入ヲ許サス但書籍ハ第三十二條ニ記載シタル制限ニ從フ

第四十條　囚人獄則ヲ謹守シ作業ニ勉勵シ且改悛ノ行爲アル者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

賞譽セシ者ニハ之ヲ表スル爲メ賞表ヲ與ヘ獄衣ニ縫著セシムヘシ

賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ證據ト爲スコトヲ得

第二十九條　囚人懲治人及刑事被告人ノ頭髮鬚髯ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ之ヲ短薙剃除セシム

第三十條　囚人及懲治人ニハ教誨ヲ施スヘシ

刑事被告人ニシテ教誨ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第三十一條　囚人十六歳未滿ノ者及懲治人ニハ毎日四時以内讀書習字算術等ヲ教フヘシ

第三十二條　囚人懲治人及刑事被告人現行ノ法律命令書ヲ看ント請フトキハ之ヲ許ス

囚人及懲治人中書籍ノ看讀ヲ請フ者アルトキハ感化若ハ紀律ニ妨ケナシト認メタルモノニ限リ之ヲ許ス

刑事被告人書籍ヲ看ント請フトキハ總テ之ヲ許ス但領置外ノ書籍ハ當該裁判官ノ承認ヲ經ヘキモノトス

第三十三條　囚人ノ發スル信書ハ一箇月一通トス但シ典獄ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニアラス

第三十四條　囚人及懲治人ノ發スル信書又ハ外人ヨリ送リ來ル信書ハ典獄之ヲ檢閲スヘシ若シ書中不正不良ニ渉リ又ハ改悛ヲ妨クルモノト認ムルトキハ之ヲ發贈付與スルコトヲ許サス但刑事被告人ニ係ル信書ハ總テ當該裁判官ノ檢閲ヲ經ヘキモノトス

第三十五條　囚人懲治人及刑事被告人ニ接見セント請フ者アルトキハ監獄官吏ノ立會ヲ以テ之ヲ許ス但シ形跡ノ疑フヘキコトアリト認ムルトキハ之ヲ許ササルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタル者ハ裁判言渡アル迄辯護人ヲ除クノ外其現在地ノ裁判所長ノ允許ヲ受クヘキ密室監禁者ハ當該裁判官ノ允許ヲ受クヘシ

第三十六條　囚人懲治人及刑事被告人疾病ニ罹ルトキハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第三十七條　囚人懲治人及刑事被告人死亡シタルトキハ典獄ハ看守長醫師ノ立會ヲ以テ之ヲ檢視スヘシ

刑死者ハ死相ヲ檢シタル後仍五分時ヲ過キサレハ其ノ遺骸ヲ絞架ヨリ解下スルコトヲ許サス

親屬若クハ故舊ニシテ遺骸ヲ請フ者アルトキハ之ヲ下付ス但シ死亡二十四時以内ニ在テ其ノ下付ヲ請フ者ナキトキハ監署ニ於テ之ヲ假葬スヘシ

傳染病豫防上必要アルトキハ監署ニ於テ之ヲ假葬スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ親屬若クハ故舊ニシテ遺骨ノ下付ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第三十八條　懲治人及刑事被告人ニ其親　故舊ヨリ書類書籍用紙衣服臥具其他必要ノ物品又ハ飲食物ヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許スコトヲ得但書類書籍ハ當該裁判官ノ檢閲ヲ受クヘシ其密室監禁者ニ係ルトキハ他物ニ於テモ亦同シ

ルモノハ前項ノ例ニアラス

第三十九條　囚人ニハ現行ノ法律命令書並ニ書籍用印紙郵便切手貨幣及内務大臣ニ於テ許可シタルモノヲ除クノ外差入ヲ許サス但書籍ハ第三十二條ニ記載シタル制限ニ從フ

第四十條　囚人獄則ヲ謹守シ作業ニ勉勵シ且改悛ノ行爲アル者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

賞譽セシ者ニハ之ヲ表スル爲メ賞表ヲ與ヘ獄衣ニ縫著セシムヘシ

賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ憑據ト爲スコトヲ得

第四十一條　賞表ヲ有スル囚人ハ其監房ヲ區別シテ尋常囚人ト異別シ賞表ノ多寡ニ應シテ優遇ヲ爲スヘシ

第四十二條　囚人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一　屏禁　晝夜他ノ監房又ハ役場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時間坐作ノ役ヲ課ス

二　減食　一回ノ糧食ヲ二分ノ一乃至三分ノ一ニ減ス

三　闇室　闇室ニ入レ一回ノ糧食ヲ二分ノ一乃至三分ノ一ニ減シ仍臥具ヲ禁ス

屏禁ハ二月以内減食ハ一週日以内闇室ハ五晝夜以内トス

第四十三條　囚人十六歳未滿ノ者及懲治人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一　獨愼　晝夜一室ニ獨居セシム

二　減食一回ノ糧食ヲ二分ノ一乃至三分ノ一ニ減ス

獨愼ハ七晝夜以内減食ハ三日以内トス

第四十四條　減食者ク𠀋闇室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ其處罰中ハ醫師ヲシテ毎日之ヲ視察セシメ醫師ニ於テ身體ニ妨アルヲ證スルトキハ處罰ヲ中止スヘシ

第四十五條　無期徒刑ノ因人重罪ヲ犯シ若ク𠀋逃走シ又ハ獄舍獄具ノ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シタルトキハ一年以上五年以下其他ノ輕罪ヲ犯シタルトキハ一月以上一年以下兩脚又ハ一脚ニ鐵ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鐵ニ貫キ腰間ニ繚帶セシメ繚帶ノ所ニ下鍵ス其監房ニ在ルモ晝間ハ仍ホ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス若シ外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第四十六條　施鐵中ノ者病ニ罹リ醫師ノ診斷ニ依リ鐵ノ解除ヲ必要トスルトキハ一時之ヲ解除スルコトヲ得但解除中經過セシ日數ハ施鐵期限ニ算入セス

第四十七條　賞表ヲ有スル者處罰ヲ受ケタルトキハ其情狀ニ因リ賞表一箇又ハ數箇ヲ褫奪スルコトアルヘシ

第四十八條　獄ヲ犯シ罰ニ處セラレタル者改悛ノ狀著シキトキハ之ヲ免スルコトヲ得

第四十九條　免幽ヲ受ケタ流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以内之ヲ拘置スルコトヲ得

第五十條　囚人懲治人及刑事被告人司獄官吏ノ處置ニ對シ情苦ヲ訴ヘントスルトキハ第四條ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第五十一條　此規則ヲ施行スル方法細則ハ内務大臣之ヲ定ム

第五十二條　此規則ハ陸海軍ニ屬スル監獄ニ適用セサルモノトス

監獄則施行細則

（明治三十二年七月内務省第三十八號）

（沿革）三十三年七月司法省令第二十七號ヲ以テ刪除

監獄則施行細則左ノ通改正ス

監獄則施行細則

第一章　通則

監獄則

第一條　新ニ入監スル者アルトキハ必要ノ書類ヲ査閲シテ之ヲ領收シ其領收證ヲ引致シ來リタル者ニ交付スヘシ

第二條　入監者ニハ先ツ之ニ番號ヲ付シ通身ヲ檢査シ名簿原簿ニ其要項ヲ詳錄シ仍ホ在監人選守ノ要件ヲ説示スヘシ

第三條　在監人ノ選守スヘキ事項ハ冊子トシ監房内ニ備ヘ置クヘシ

第四條　監房前ニハ下部ニ番號入監年月日上部ニ氏名罪質刑名刑期留置期限犯數生年月日ヲ記載シタル小札ヲ掲クヘシ但上部ハ之ヲ掩フモノトス

第五條　領置ノ貨物ハ其品名數量ヲ簿冊ニ記載シ典獄之ニ證印スヘシ

第六條　領置ノ貨物ハ本人釋放ノ時之ヲ下付スヘシ

入監ノ際携帶ノ物品ニシテ監獄官吏ニ於テ保存ノ價値ナシト認メタルモノ又ハ保存ニ堪ヘ難キモノ又ハ保存ニ不便ナルモノハ本人ヘ告知ノ上之カ領置ヲ拒ムコトヲ得但本人ノ請求アルトキハ之ヲ賣却シテ其代金ヲ領置スヘシ

第七條　在監中外人ヨリ差入タル物品ニシテ領置スルモノモ亦第五條第六條ノ例ニ依ル

在監人ノ親屬故舊ヨリ領置貨物ノ下付ヲ請フトキハ本人ノ承諾ヲ得テ之ヲ許可スルコトヲ得

第八條　總テ監房ニ入ルル物品ハ之ヲ點檢シ其危險ノ虞アルモノハ之ヲ禁スヘシ

第九條　在監人入房ノ際ハ總テ通身ノ檢査ヲ爲スヘシ

通身ノ檢査ハ一人宛之ヲ爲シ他人ヲシテ見セシムヘカラス但工場教誨堂運動浴室等ヨリ一時多人數ヲ還房セシムル場合ハ此限ニ在ラス

男子ノ檢身ハ看守長臨監シ看守之ヲ行ヒ女子ニ係ルトキハ女監取締之ヲ行フヘシ

第十條　囚人及懲治人ノ放免期日ハ入監後直ニ之ヲ調査シテ放免曆簿ニ記入シ仍ホ本人ニ告知スヘシ

第十一條　釋放スヘキ者アルトキハ典獄ハ名籍原簿ニ照シテ其氏名相貌等ヲ糺シ釋放ヲ言渡スヘシ

第十二條　領置ノ貨物ヲ下付スルトキハ其名數ヲ簿冊ニ照シテ其旨ヲ記シ受取人ヲシテ證明セシムヘシ

第十三條　同日ニ數名ノ釋放者アルトキハ各其釋放時ヲ異ニスヘシ但刑事被告人ハ此限ニ在ラス

第十四條　刑事被告人中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲スルコトヲ得サラシムヘシ裁判所又ハ其他ニ押送ノトキハ亦同シ

第十五條　（削除）

第十六條　特赦免幽閉出獄ノ申渡ハ其裁可又ハ許可ノ監署ニ達シタル時ヨリ二十四時以内ニ之ヲ爲スヘシ

假出獄ノ申渡ヲ受ケタル者ニハ典獄其證票ヲ與ヘテ最近ノ警察署ニ護送スヘシ

第十七條　特赦免幽閉假出獄ノ申渡ハ別ニ定ムル方式ニ依テ行フヘシ

第十八條　免幽閉ノ申渡ヲ受ケタル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ居住セシメ典獄之ヲ監督スヘシ但土地家屋ナキ者ニハ之ヲ貸與ス

已ムヲ得サル事故アリテ一時限外ニ出ンコトヲ請フトキハ典獄ニ於テ其事由ヲ取糺シテ許可スルコトアルヘシ

第十九條　免幽閉中重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ上免幽閉ヲ爲シタル監獄ニ於テ直ニ其刑ヲ執行スヘシ

第二十條　免幽閉ノ申渡ヲ受ケタル者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キテ同居シ又ハ結婚セント請フトキハ典獄其生計ノ方法ヲ取糺シテ許可スヘシ

第二十一條　假出獄中重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ上現ニ之ヲ管束スル典獄ニ於テ假出獄ノ停止ヲ言渡シ證票ヲ取上ケ其旨ヲ所屬長官ニ申報シ所屬長官ハ內務司法兩大臣ニ稟報スヘシ

甲地ニ於テ假出獄ヲ許サレタル者ヲ乙地ニ於テ停止シタルトキハ乙地典獄ヨリ其取上タル證票ヲ甲地典獄ニ送致シテ其旨ヲ通知スヘシ

前項ニ依リ乙地ニ於テ假出獄ヲ停止シタルトキハ集治監ニ入ルヘキ者ヲ除クノ外其地監獄ニ拘禁シ前刑後刑トモ乙地ニ於テ之ヲ執行スヘシ

第二十二條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル者アルトキハ他ノ者ト別異シ一房ニ一人ヲ拘禁シテ特ニ戒護ヲ嚴ニスヘシ

第二十三條　死刑ノ執行ハ午前十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ナシテ嚴ニ刑場ノ門戶ヲ護ラシムヘシ

第二十四條　死刑ヲ執行スヘキ者同時ニ二人以上アルトキハ一人宛執行シ其間他ノ受刑者ヲシテ刑場ニ入ラシムヘカラス

第二十五條　死刑ハ受刑者自衣著用ノ儘之ヲ執行スルコトヲ得

第二十六條　雜居監房ハ相當官吏ノ立會アルニアラサレハ開扉スルコトヲ得ス但在監人ノアツサルトキハ此限ニ在ラス

第二十七條　同一監房ニハ二人ヲ拘禁スルコトヲ得ス

餘罪又ハ刑期限內犯罪ノ爲メ審問中ニ係ル囚人ハ一房ニ一人ヲ拘禁スヘシ

第二十八條　囚人ノ監房ニハ疊ヲ敷クコトヲ得ス但病監又ハ特ニ內務大臣ノ認可アリタル場合ハ此限ニ在ラス

第二十九條　雜居監房ニ下付ハル書籍ハ一人同時ニ三冊ヲ超ユヘカラス但字書ハ此限ニ在ラス

第三十條　監房內ニ在テハ各自ノ席次ヲ定ムヘシ工場ニ在テモ亦同シ

第三十一條　各監房ト看守所間ニハ報知器ノ設備ヲ爲スヘシ

第三十二條　死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ墻壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第三十三條　各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同クシ彼此供用スルヲ得セシムヘシ

第三十四條　監獄ニハ消防器ヲ備ヘ置クヘシ

第三十五條　極寒ノ季節ニ在テ必要ト認ムルトキハ煖房ノ設備ヲ爲スヘシ

第二章　作業

第三十六條　作業ヲ指定セントスルトキハ先ツ醫師ヲシテ其就業スヘキ者ノ身體ヲ診査セシムヘシ

第三十七條　作業ハ科程ヲ定メテ服サシムヘシ

科程ハ普通一人ノ働高ヲ以テ等一ニ之ヲ定ム但老者幼者病弱者不具者未熟者等ハ此限ニ在ラス

炊事洒掃看病等科程ヲ付シ難キモノハ一定ノ就業時間ヲ以テ一日ノ科程トス

第三十八條　監獄作業ノ種類ハ內務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三十九條　外役セシムヘキ囚人ハ刑期ノ二分ノ一ヲ經過シタル者ノ中ニ就キ之ヲ撰ムヘシ但刑期二分ノ一ヲ經過セサル者ニシテ特別ノ必要アルトキハ内務大臣ノ認可ヲ經テ外役セシムルコトヲ得

刑期六箇月以下ノ者及女囚ハ外役セシムルコトヲ得ス

第四十條　外役ニ服セシムルモノハ鍊鐵ノ鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆シ晴雨ヲ問ハス笠ヲ用テ其面ヲ掩ハシムヘシ

外役ノ囚人ハ看守二人以上ヲシテ戒護セシムヘシ

第四十一條　理髮罫紙摺掃除等ノ如キ監獄用ノ業ニシテ終日使役シ難キモノハ副業トシテ之ヲ課スヘシ

第四十二條　作業ノ出來高ハ毎日一回各囚ニ就キ之ヲ檢査スヘシ

第四十三條　科程ノ了否ハ一箇月分ヲ積算調査シテ之ヲ定ムヘシ

第四十四條　服役セシムヘキ在監人ハ左ノ時間就役セシムルモノトス但地方ノ狀況又ハ監獄ノ構造ニ依リ内務大臣ノ認可ヲ經テ伸縮スルコトヲ得

一月 十二月	七時間	十月	八時三十分間
十一月	七時三十分間	三月 九月	九時間
二月	八時間	四月	九時三十分間
		五月 八月	十時間
		六月 七月	十時三十分間

第四十五條　無定役囚及刑事被告人ニシテ作業ニ服スル者ニハ本章ノ規定ヲ準用ス

第三章　工錢

第四十六條　作業ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ニ照シ各自ノ技能ト就役時間トニ應シ之ヲ定ムヘシ

工錢ハ六箇月ニ一回以上之ヲ調査料定スルヲ要ス

第四十七條　定役囚ニハ左ノ例ニ從ヒ工錢ヲ給與ス

一　初入者ニハ重罪囚十分ノ二輕罪囚十分ノ三

一　再入者ニハ重罪囚十分ノ一輕罪囚十分ノ二

但再入者ニシテ刑期一年以上經過シ作業ニ勉勵スルトキハ初入者ノ例ニ準スルコトヲ得

第四十八條　免役日ニ於テ囚人ヲ使役スルトキハ科程外ノ工錢ヲ與フヘシ

第四十九條　屏禁處罰中ハ工錢ヲ給與セス

第五十條　在監人ニ與フヘキ工錢ハ毎月十日以内ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ示スヘシ

第四章　給與

第五十一條　囚人ノ衣類ハ赭色懲治人及刑事被告人ニ貸與スル衣類ハ淺葱色ニシテ總テ筒袖トシ常服ト就役服トヲ別ツヘシ

第五十二條　囚人ノ蒲團ハ赭色懲治人及刑事被告人ノ蒲團ハ淺葱色トシ各自ニ貸與ス

第五十三條　懲治人及刑事被告人ノ著用スル衣類ニシテ時季ニ適セス又ハ汚損其他衛生上ニ害アリト認ムルトキハ之ヲ貸與ス

第五十四條　在監人ノ衣服ノ外襟及蒲團ニハ白布ヲ縫著シ之ニ其者ノ番號ヲ記スヘシ

第五十五條　囚人ノ衣類及貸與ノ衣類雜具左ノ如シ

衣類
一　單衣
一　袷
一　綿入
一　襦袢
一　股引
一　婦女ニハ股引ニ代テ前垂ヲ貸與ス

雜具
一　臥具
一　蚊帳
一　莞莚
一　枕
一　帶
一　褌
一　手巾
一　雨具
一　冠物
一　履物

以上ノ外用紙ハ別ニ之ヲ給與ス其他必要アル場合ニ於テハ內務大臣ノ認可ヲ得テ其品目ヲ變更又ハ增減スルコトヲ得

第五十六條　病者ノ衣類雜具ハ醫士ノ意見ニ依リ典獄ニ於テ變更又ハ消滅スルコトヲ得

第五十七條　療養ノ爲メ必要ナル飲食物ハ醫師ノ意見ニ依リ之ヲ給與スヘシ

第五十八條　囚人及懲治人ニシテ二回以上ノ領置工錢ヲ有シ作業ニ勉勵シ行狀方正ナルトキハ其請ニ依リ工錢ヲ以テ食物購求ヲ許スコトヲ得但其種類分量ハ典獄豫メ制限ヲ設クヘシ

第五十九條　工錢ヲ以テ食物ヲ購求スルハ一月五回以下ニシテ一回五錢ヲ超ユルコトヲ得ス但購求費ハ前月分給與工錢ノ三分ノ一以內トス

第六十條　食物ノ購求ハ懲罰中並ニ處罰後一箇月ヲ經ルニアラサレハ之ヲ許可スルコトヲ得ス

第五章　衞生及死亡

第六十一條　監獄ハ常ニ清掃シ則圊並ニ便器ハ度數ヲ定メ掃除スヘシ

第六十二條　病者ノ居室身體衣類臥具等ハ特ニ清潔ニシ離隔消毒ヲ嚴ニスヘシ

第六十三條　刑事被告人無定役囚及分房ニ在ル囚人ハ每日三十分時以上監房外ニ於テ運動ヲ爲サシムヘシ

第六十四條　監獄ニハ體量器ヲ備ヘ置キ入出監ノ際、處罰前後、其他一箇年一回以上體重ヲ量ルヘシ

第六十五條　衣類臥具其他ノ物品ハ種質ニ由リ蒸汽其他適當ノ方法ヲ用ヒ臭氣ヲ除キ蟲害ヲ防クヘシ但病者ノ物品ハ特ニ注意ヲ施シ他物ト混同スヘカラス

第六十六條　入浴ノ度數ハ作業ノ種類其他ノ狀況ニ依リ之ヲ定ム但每年六月ヨリ九月マテハ五日每ニ一回十月ヨリ五月マテハ十日每ニ一回ヲ下ルヲ得ス

第六十七條　在監人ノ鬚髮ハ常メタルトキハ之ヲ剃刈スルコトヲ得

第六十八條　髮ヲ短薙セサル者ノ監房ニ木梳ヲ備ヘ置クヘシ

第六十九條　傳染病流行ノ兆アルトキハ其豫防ヲ嚴密ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ離隔室ニ移シ其消毒ヲ嚴ニシ病性及感染ノ狀況ヲ詳ニシ典獄ヨリ所屬長官ヘ申報シ且其旨ヲ市町村役場及警察署ニ通知スヘシ

第七十條　傳染病流行ノ際ハ飲食物ノ差入及購求ヲ停止スルコトヲ得

第七十一條　傳染病流行地ヲ發シ若クハ其地方ヲ經過シタル者新ニ入監スルトキハ一週日以上他ノ者ト離隔シ其携帶スル物品ハ消毒ヲ行フヘシ

第七十二條　危篤ノ病者アルトキハ直ニ親屬ニ通知シ刑事被告人ナルトキハ尙其旨ヲ裁判所ニ通知スヘシ

第七十三條　死亡者又ハ刑死者アルトキハ其年月日ヲ記シ典獄ヨリ親屬ニ通知スヘシ刑事被告人死亡シ又ハ囚人及懲治人ニシテ裁判所ノ訊問中ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十四條　在監人病死シタルトキハ醫師ノ診案ニヨリ病症及其因由並ニ死亡ノ年月日時ヲ死亡帳ニ記載スヘシ若シ變死シタルトキハ醫師ノ檢案ニ依リ死亡ノ因由及其年月日場所死狀ヲ詳記スヘシ

第七十五條　死者ノ親屬若クハ故舊ニ其遺骸ノ下付ヲ許シタルトキハ其者ヲシテ死亡帳ニ證明セシムヘシ

監署ニ於テ遺骸假葬シタルトキハ棺ニ入レテ之ヲ埋メ其上ニ面三寸長三尺五寸ニ過キサル氏名標ヲ建ツヘシ

第七十六條　在監人ノ遺骸ハ假葬シタル後ト雖モ下付ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第七十七條　死亡者ノ領置貨物アルトキハ親屬ニ下付ス親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ公賣シテ代價ヲ遞送スルコトヲ得但遞送費ハ親屬ノ自辨トス

第七十八條　假葬シタル死亡者刑死者ノ遺骸ニシテ滿三箇年ニ至ルモ引受人ナキトキハ更ニ合葬スルコト得但合葬シタルトキハ其墓標ニ石ヲ用ユヘシ

第六章　書信及接見

第七十九條　在監人ヨリ發スル信書ハ一定ノ書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ封緘發送スルモノトシ郵便稅ハ自辨トス但郵便端書ヲ用ヒシムルモ妨ナシ

官司ノ訊問ニ依テ發信ヲ要スルニ當リ郵便稅ヲ自辨スルコト能ハサルトキハ監獄費ヲ以テ支辨スヘシ

第八十條　囚人ヨリ發スル信書ハ一定ノ日時ニ於テ認メシムヘシ但要急ノモノハ此限ニ在ラス

第八十一條　在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ其氏名身分住所職業及事由ヲ詳悉シタル上之ヲ許スモノトス

接見ノ時間ハ三十分時ヲ過クルヲ得ス但死刑ノ執行以前及集治監ニ押送以前ニ係ル囚人ニハ特ニ一時間ノ接見ヲ許スコトヲ得

辯護人トノ接見ハ前項ノ限ニ在ラス

第八十二條　接見ヲ許シタル者若シ接見ヲ謂ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲ爲シタルカ又ハ姿貌

其他形狀等ヲ以テ相通スルノ形跡アルトキハ之ヲ停止スヘシ

第八十三條　接見ノ際在監人男子ニ係ルトキハ看守長看守立會、女子ニ係ルトキハ看守長女監取締立會フヘシ

第八十四條　病者トノ接見ハ危篤ノ際ニ限リ病監ニ於テ之ヲ爲サシムルコトヲ得

第八十五條　在監人接見時限ハ午前八時ヨリ午後四時迄ノ間トス

第七章　差入品

第八十六條　刑事被告人及懲治人ニ差入ルヘキ飲食物ハ酒及煙草ヲ除キ監獄内ニ於テ炊烹ヲ要セサルモノニシテ一日三回一人一食ノ量ニ限ル

第八十七條　總テ差入品ハ看守長立會、看守ニ於テ之ヲ檢査スヘシ但飲食物ノ檢査ニハ醫師ヲシテ立會ハシムヘシ

第八十八條　檢査ノ爲メ解縫シタル衣類臥具ニシテ差入ヲ許スモノハ監獄ニ於テ之ヲ原形ニ復スヘシ

第八十九條　免幽閉ヲ受ケタル者親屬故舊ヨリ金錢衣服家具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第八章　教誨及教育

第九十條　教誨ハ免役日日曜日又ハ休役間ニ於テ之ヲ行フヘシ

第九十一條　免役日及日曜日ノ教誨ハ教誨堂ニ於テシ休役間ノ教誨ハ被教誨者ノ居所ニ就キ之ヲ爲スモノトス

第九十二條　幼年囚懲治人ノ教育ハ小學程度ニ依リ修身讀書算術地理歴史習字體操其他必要ナル學科ヲ授クル者トス

第九十三條　賞表ハ典尺長二寸幅一寸ノ白色ノ布ヲ用ヒ上衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ縫著スルモノトス

第九十四條　賞表ヲ有スル者ニハ左ノ優遇ヲ爲スモノトス

一　衣類雜具ハ成ルヘク良品ヲ貸與ス

二　書信ハ一箇月ニ二通之ヲ爲スコトヲ許ス

三　入浴ハ尋常囚人ニ先キタヽシムルコトアルヘシ

四　賞表一箇ヲ得タル者ニハ菜ヲ一週ニ一回其二箇ヲ得タル者ニハ二回其三箇ヲ得タル者ニハ三回增給ス但其價ハ一回金二錢ヲ超ユルコトヲ得ス

五　定役囚ノ工錢ハ左ノ例ニ依リ給與スルモノトス

賞表一箇ヲ得タル重罪囚ニハ十分ノ三輕罪囚ニハ十分ノ四其二箇ヲ得タル重罪囚ニハ十分ノ四輕罪囚ニハ十分ノ五其三箇ヲ得タル重罪囚ニハ十分ノ五輕罪囚ニハ十分ノ六ヲ給ス

第九十五條　在監人左ニ掲ケタル所爲アルトキハ金五十錢以下ヲ以テ之ヲ賞與スルコトヲ得但賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス

一　在人ノ逃走セントスル者ヲ密告シタルトキ

二　人命ヲ救援シ及逃走者ヲ捕得シタルトキ

三　監獄ニ係ル水火風災ヲ防禦シタトキ

刑事被告人ニ係ルトキハ所屬長官ニ申報シ仍ホ當該裁判官ニ通知スヘシ

第十章　懲罰

第九十六條　在監人中犯則者アルトキハ其取調中他ノ者ト離隔シ置クヘシ

第九十七條　懲罰ヲ受ケタル者ハ其罰期終ルモ監房ヲ別異スヘシ但改悛ノ狀著シキトキハ合居セシムルコトヲ得

第九十八條　懲罰ニ處セラレタル者裁判事件ニテ出廷スルトキハ當日ニ限リ其執行ヲ中止スヘシ但中止中經過セシ日數ハ懲罰期限ニ算入スヘカラス

第九十九條　兩脚ニ施鐵ノ者改悛ノ狀顯ハレ其施鐵期限ノ半ヲ經過シタルトキハ一脚ノ鐵ハ免除スルコトヲ得

第百條　施鐵ノ者改悛ノ狀最モ顯著ニシテ其施鐵ノ期限ノ四分ノ三ヲ經過シタルトキハ假ニ其鐵ヲ免除スルコトヲ得

第百一條　假ニ鐵ヲ免除シタル者其罰期內更ニ懲罰ヲ受クルトキハ直ニ之ヲ復シ其假免中經過セシ日數ハ施鐵期限ニ算入スヘカラス

第百二條　懲罰ニ處シタル者アルトキハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ視察シ教誨師醫師ヲシテ之ヲ訪問セシムヘシ

◎特赦免幽閉假出獄申渡方式

（明治三十二年七月　內務省訓令第二十八號）
（廳府縣（東京府ヲ除ク）集治監　假留監）

監獄則施行細則第十七條特赦免幽閉假出獄申渡方式左ノ通定ム

第一條　特赦免幽閉假出獄ノ申渡ハ教誨堂又ハ多囚ヲ整列セシムルニ足ルヘキ場所ヲ以テ之ニ充テ典獄書記看守長教誨師監獄醫列席ノ上之ヲ行フヘシ但女囚ハ男囚ト之ヲ各別ニ行フヘシ

第二條　式場ニハ特赦免幽閉假出獄ヲ受クヘキ者及多囚ヲ整列セシメ典獄ヨリ一人每ニ之ヲ言渡シ證票ヲ授與シ免幽閉假出獄者ニハ尙出獄後ノ心得方ヲ諭示スヘシ

◎名籍原簿囚人身分帳在監人名目錄放免曆簿出監簿死亡帳假出獄證票

樣式

（明治二十六年十二月內務省訓令第二十九號）
（沿革）二九年內務訓第七號、同年拓殖訓第一三號、三〇年內務訓第一〇號、三四年

司法訓第一〇號、三八年司法訓第三號改正

明治二十二年(七月)當省訓令第三十三號ハ相廢シ名籍原簿囚人身分帳在監人名目錄放免曆簿出監簿死亡帳假出獄證票別冊ノ通相定ム(別冊略ス)

但從來名籍原簿身分帳ノ設ケアル所ニ在テハ漸次本樣式ニ改ムルコトヲ得

◎假留監設置ニ付徒流刑、禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及聯合地方區分

(明治十七年七月內務省達乙第三十號)

(沿革)　二十年內務訓令一一號ヲ以テ假留監聯合地方中改正二十一年內務訓令一八號ヲ以テ假留監聯合地方中改正二十二年內務訓令第三號ヲ以テ奈良香川ノ二縣追加二十五年內務訓令一〇號ヲ以テ假留監聯合地方中改正二十六年內務訓令二〇號ヲ以テ元兵庫假留監聯合地方ヲ東京三池聯合ヘ編入二十九年內務訓令五號ヲ以テ東京假留監聯合地方京都府大阪府奈良縣和歌山縣ヲ三池假留監聯合地方ニ改正

警視廳　府縣(東京府ヲ除ク)　假留監

今般各假留監設置セラレ候ニ付徒刑流刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及ヒ聯合地方ノ區分左ノ通相定候條此旨相達候事

徒刑流刑禁獄送致方

一徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判所確定セシ時ハ之ヲ管束セシ地方ヨリ警察遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監ヘ押送スヘシ

但本監ノ都合ニ依リ典獄ヨリ其聯合地方ヘ囚徒押送ノ延期ヲ通知スルコトアルヘシ

聯合地方區分

一東京假留監　警視廳　神奈川縣　埼玉縣　千葉縣　滋賀縣　福井縣
石川縣　富山縣　三重縣　愛知縣　靜岡縣　山梨縣
岐阜縣　長野縣

一宮城假留監　新潟縣　福島縣　宮城縣　岩手縣　青森縣　秋田縣
山形縣　茨城縣　群馬縣　栃木縣

一三池假留監　長崎縣　福岡縣　大分縣　佐賀縣　熊本縣　宮崎縣
鹿兒島縣　兵庫縣　鳥取縣　島根縣　岡山縣　廣島縣
山口縣　德島縣　香川縣　愛媛縣　高知縣　京都府
大阪府　奈良縣　和歌山縣

◎舊刑法ニテ禁獄懲役ニ處セ

ラレ地方監獄ニ拘禁ノ囚徒假留監ヘ押送方

（明治十九年六月内務省訓令第十一號）

警視廳　府縣（東京府沖繩縣ヲ除ク）

舊刑法ニテ國事犯禁獄懲役五年以上及ヒ常事犯禁獄終身ニ處セラレタル囚徒地方監獄ニ拘禁ノ者ハ十七年當省乙第三十號達ニ準シ直ニ假留監ヘ押送スヘシ

府縣監獄費及府縣監獄建築修繕費ノ國庫支辨ニ關スル件

（明治三十三年一月法律第四號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル府縣監獄費及府監獄建築修繕費ノ國庫支辨ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　監獄ニ關スル費用ハ總テ國庫ニ於テ之ヲ支辨ス

第二條　府縣監獄ニ屬スル府縣有土地建物器具器械素品製品其ノ他ノ物件ハ國庫ニ歸屬ス

附則

第三條　本法ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

第四條　本法發布以後施行ノ日迄ノ間ニ於テ第二條ニ揭クル土地物件ノ處分ヲ要スルトキハ命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ノ外內務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條　本法施行ノ際國庫地方費ノ區分ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

三十三年法律第四號施行ノ際國庫地方費ノ區分ニ關スル件

（明治三十三年七月勅令第三百十六號）

朕明治三十三年法律第四號施行ノ際ニ於ケル國庫地方費ノ區分ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治三十三年法律第四號施行ノ際ニ於ケル國庫地方費ノ區分、本令ノ規定ニ依ル

第二條　收入未濟金ノ區分ハ其收入スヘキ事實ノ生シタル日ノ所屬ニ依リテ之ヲ定ム

第三條　支出未濟金ノ區分ハ左ノ各號ニ依リテ之ヲ定ム

第一　看守給助年金ハ其支拂期日ノ所屬

第二　物件買入代價ハ其納付ヲ爲シタル日ノ所屬

第三　前各號ノ類別ニ入ラサルモノハ總テ其事實ノ生シタル日ノ所屬

◎在府縣獄囚徒費取扱方

（明治十七年六月內務省達乙第二十九號）
警視廳　府縣（沖繩縣北海道ヲ除ク）

在府縣獄囚徒費取扱方左ノ通改正候條十七年度ヨリ施行スヘシ此旨相達候事
但十四年七月內務大藏兩省乙第三十四號同年九月乙第四十二號十五年十月乙第五十三號ノ達ハ十六年度限リ廢止ス

一　集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者檢束衣食一切（從前ノ獄署費已決囚諸費營繕費）ノ費用トシテ一囚一日ニ付金貳拾錢ヲ交付スヘシ
但朝夕出入アルモ各一日ヲ以テ計算スヘシ

一　十四年十月乙第五十三號達ノ內現員表ハ差出ニ不及前々年中宣告濟人員ニヨリ左ノ科目表ニ照準豫算帳調整定期ノ通差出スヘシ
但十七年度分ハ差出ニ及ハス

改定科目				
大科目	中科目	小科目	細科目	備考

在府縣獄囚徒費				
		○		
	囚徒在監諸費	押送費		
○	○	○		
從前ノ獄署費已決囚諸費營繕費ヲ決算スルノ科目ナリ	集治監ヘ押送費用ヲ決算スルノ科目ナリ（途中ノ衣服代ハ茲ニ編入ス）			

（十八年內務達甲一四號ヲ以テ科目改正）

◎府縣ノ監獄別房ニ置留スヘキ者ノ費用

（明治三十年二月內務省訓令第四號）

廳　府縣（東京府沖繩縣ヲ除ク）

國庫費支辨ノ囚徒本刑滿期ト爲リ府縣ノ監獄別房ニ留置スヘキ者ノ費用ハ明治十七年本省達乙第二十九號ニ依リ交付スヘキヲ以テ右囚徒ノ衣食費ハ其得タル工錢ヨリ之ヲ精算シ國庫ニ納付スヘシ但其工錢ニシテ衣食費ヲ償フニ足ラサルトキハ其工錢全額ヲ納付ス

ルモノトス

◎懲役終身又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其費用ハ舊ニ依ル

（明治十八年九月　内務省達番外）

警視廳　府縣（東京府沖繩縣北海道三縣ヲ除ク）

懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其囚徒ニ係ル一切ノ費用ハ從前ノ通國庫費ヨリ支辨候條此旨相達候事

◎在監人賞譽規程

（明治三十四年十二月　司法省訓令一一號）

廳府縣（東京府ヲ除ク）　集治監

明治三十年（二月）内務省訓令第五號在監人行狀勘査及賞譽規定ヲ廢止シ在監人賞譽規程左ノ通相定ム

在監人賞譽規程

第一條　賞譽ハ獄則ヲ謹守シ作業ニ精勵シ且眞心改悛ノ狀顯ハレ他囚ノ鑑トナルヘキ行爲アル者ニ對シ第二條規定ノ期間經過後一回ツヽ之ヲ行ヒ賞表三箇ニ至リテ止ムルモノトス

第二條　囚人ハ入監後二箇年經過スルニアラサレハ賞譽スルコトヲ得ス

各賞譽ノ期間ハ二箇年トス

第三條　賞表ヲ褫奪シタルトキハ其褫奪シタル日ヨリ二箇年ヲ經過スルニアラサレハ再ヒ賞譽スルコトヲ得ス

第四條　在監人ノ行狀ハ概ヲ左ノ事項ニ依リ看守又ハ女監取締ヲシテ視察セシメ細大漏サス報告簿ニ記入ノ上之ヲ看守長ニ提出セシムヘシ

一　獄則及紀律ノ遵否ニ關スル事項

二　親屬及故舊ニ對スル思念ニ關スル事項

三　教誨及教育ニ關スル事項

四　作業及工錢ニ關スル事項

五　清潔衛生ニ關スル事項

看守長又ハ看守又ハ女監取締ノ提出シタル報告簿ヲ參酌シ自己ノ意見ヲ定メ少クトモ二箇月ニ一回身分帳行狀錄ニ記入スヘシ

第五條　賞譽ヲ行ハントスルトキハ典獄ハ各囚賞譽期ノ終リタル日ニ於テ監獄書記看守長監獄醫教誨師ヲ會同シ身分帳ニ依リ行狀ヲ審査シ之ニ對スル意見ヲ諮問シ自ラ之ヲ判定スヘシ但シ必要ト認メタルトキハ看守女監取締及援業手ヲ列席セシムルコトヲ得

第六條　懲治人ニシテ行狀善良ナル者ハ前數條ニ準シテ賞譽スルコトヲ得

◎假出場規則（明治十九年十一月内務省令第二十四號）

刑法第七十五條第八十條第八十二條ニ依リ懲治場ニ留置セラレタル者ニシテ獄則ヲ謹守シ改悛ノ狀アルトキハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ左ノ規則ニ據リ假ニ出場ヲ許スコトヲ得

假出場規則

第一條　假出場ヲ許スヘキ者アル時ハ典獄ヨリ其長官ニ狀ヲ具シテ認可ヲ受ク可シ

第二條　假出場ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ本人ニ下付ス可シ

第三條　假出場證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　本人ノ屬籍氏名年齡住所懲治期限及ヒ宣告並ニ滿期ノ年月日

一　殘期何年何月何日間假出場ヲ許ス（何年何月何日起何年何月何日滿）

一　本日出場ヲ許スニ由リ住居ノ地ニ歸著ノ上ハ即時所轄警察署ニ其旨ヲ屆出ツヘシ

一　毎月一回謹愼ヲ表スル爲メ所轄警察署ニ到リ假出場證票ヲ出シ警察官吏ノ認印ヲ受ク可シ但己ムヲ得サル事故アレハ其事由ヲ屆出ツ可シ

一　一日程ヲ過クル地ニ旅行スル時ハ其行先並往復滯在日數等ヲ詳記シ所轄警察署ニ屆出可シ但其滯在一月以上ニ渉ル時ハ一箇月毎ニ其滯在地ノ警察署ニ到リ前項ノ手續ヲナス可シ

一　事故アリテ其住居ヲ轉スル時ハ所轄警察署ニ屆出ツ可シ

一　第三項以下ノ事ハ本人自ラ爲ス能ハサル場合ニ於テハ親屬故舊代リテ之ヲ爲スコトヲ得

右ノ各項ニ違背シタルトキハ直チニ出場ヲ停止シ出場中ノ日數ヲ懲治期限内ニ算入スルコトヲ得ス

第四條　假出場ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ假出場證票及懲治申渡書ノ謄本ヲ具シ本人住居ノ地ノ警察署ニ通知スヘシ

第五條　警察署ニ於テ轉居ノ屆ヲ得タル時ハ之ヲ其轉居地ノ警察署ニ通知シ第四條ニ記載シタル書類ヲ遞送スヘシ

第六條　假出場ヲ許スヘキ者住所ナク及引取人ナキ時ハ猶ホ懲治場ニ留置シテ他ノ懲治者ト殿ニ別異ス可シ但住居遠地ニアリテ歸省スルノ資力ナキ者モ亦同シ

第七條　假出場ヲ停止スヘキ時ハ本人住居ノ地ノ典獄ニ於テ其旨ヲ言渡シ直チニ假出場證票ヲ取上ケ其殘期ヲ執行ス可シ但甲地方ニ於テ下付セシ證票ヲ乙地方ニ於テ取上ケタル時ハ其事狀甲地方典獄ニ通知シ證票ヲ送致ス可シ

第八條　假出場ヲ許サレタル者懲治期滿期ノ日ニ到レハ假出場證票ヲ所轄警察署ニ還納シ該警察署ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ之ヲ遞送ス可シ

◎精神病者タル在監人放免ニ關スル取扱手續（明治三十四年六月内務省訓令第七號）

廳府縣（東京府ヲ除ク）集治監

精神病者ヲ監置ノ必要アル精神病者ヲ監置監人ニ關シテハ監獄ノ首長ハ其ノ居所前相當ノ時期ニカテ監護義務者ニ通知シ監護義務者ナキカ又ハ監護義務者其ノ義務ノ履行スルコト能ハサル事由アルトキハ精神病者（住所地ナキカ若クハ不明ナルトキハ監獄所在地）ノ市區町村長ニ通知シ之ヲ引取ラシムルノ手續ヲ爲スヘシ

前項ノ手續ヲ爲スモ放免ノ際現ニ之ヲ引取ル者ナキ場合ニ於テハ監獄ノ首長ハ其ノ所在ノ警察官署ニ通知シ之ヲ引渡シ警察官署ハ監護義務者又ハ市區町村長等ニ之ヲ引取ラシムルノ手續ヲ爲スヘシ

監獄ノ首長前各項ノ通知ヲ爲ストキハ醫師ノ診斷書其ノ他必要ナル書類ヲ添付スヘシ

◎陸海軍監獄ヨリ地方監獄ヘ送附ノ處刑者處分方

（明治二十年三月 内務省訓令第十六號）

警視廳　府縣（東京府ヲ除ク）

陸海軍軍法會議ノ處刑者費用區分方客歲一月甲第一號ヲ以テ相達候ニ付テハ來ル二十年度以降右處刑者アル毎ニ總テ該軍監獄ヨリ直チニ地方監獄ヘ送付ノ筈ニ付軍法會議所在ノ地方獄ニ於テハ其都度之ヲ收監シ普通裁判所處斷ノ者ト同樣取扱ヒ其地方稅支辨ニ屬スヘキ者ハ其刑ヲ執行シ國庫費支辨ニ屬スヘキモノハ直チニ假留監ニ押送スヘシ

但從前陸軍法衙ヨリ發配ノモノ有之候ハハ本文同樣取計フヘシ

◎陸軍監獄條例第一條明文外ノ囚人

取扱方

（明治二十七年二月 内務省訓令第七號）

廳府縣　集治監　假留監

今般發布ノ勅令第三號陸軍監獄條例第一條明文外ノ囚人ハ陸軍軍法會議ニ於テ處斷セラレタルモノト雖モ該軍法會議所在ノ地方監獄ニ收監シ普通裁判所處斷囚同樣ニ取扱ヒ其集治監ニ入ルヘキモノハ假留監ヘ押送收監スヘシ費用ハ其所屬監獄費ヲ以テ支辨シ囑托婦女ニ係ル費用ハ一日一人金二十錢ノ割ヲ以テ陸軍省ヘ請求スヘシ

◎陸軍、軍法會議ノ處斷ヲ受ケ地方監獄ニ拘禁セラヘキ者所屬ノ件

（明治二十八年五月 内務省訓令第七號）

廳府縣

陸軍、軍法會議ノ處斷ヲ受ケ地方監獄ニ拘禁セラルヘキ者ニ在テハ軍籍又ハ所屬部隊アル者ハ其屬スル軍隊又ハ軍隊所在ノ地方監獄ノ所屬トシ軍籍又ハ所屬隊ナキモノハ該囚住居地ノ地方監獄現在ノ住居地ナキモノハ最終ノ住居地々監獄ニ屬スル儀ト心得ヘシ

◎在監人工錢給與手續

（明治二十一年十月 内務省訓令第二十二號）

警視廳　府縣（沖繩縣ヲ除ク）

[illegible]設ケテ之ヲ支拂ヒ其工錢ハ監獄費雜入ニ編入スルコトヲ得

◎處刑者及囚人死亡者屆出方

（明治十九年二月　內務省達甲第四號）

總府縣（東京府ヲ除ク）

徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルトキハ監獄則第五十八條ニ依リ申報シ及ヒ該囚徒拘禁中死亡セルモノアルトキハ其度屆出來リシ處自今以後總テ其儀ニ及ハス但變死者ハ從前ノ通屆出ヘシ

◎刑死者及獄死者ノ遺骸ヲ官公立醫學校病院ニ於テ解剖スルヲ得

（明治十八年七月　內務省達甲第二十五號）

總府縣

監獄則ニ揭クル所ノ刑死者及死亡者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下付ヲ請フ者ナキトキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖實驗ノ用ニ供スルヲ得此旨相達候事

但屍體剖觀ノ後ハ鋪理シテ原體ニ復シ不都合無之樣取計ハシムヘシ

明治三十九年五月一日印刷
明治三十九年五月十日發行

定價　七拾五錢

大阪市西區九條町五丁目番外千百八十八番邸
編纂兼發行者　船長　堀田金吾

印刷所　日ノ出活版所
大阪市西區九條町五丁目番外千百八十八番邸
堀田航盛館

大販賣所
販賣所
大阪市西區本田町通二丁目百六十二番邸
航盛館支店

不許複製

禁電子式複写

031032－000－7

CZ－5－0173

大日本六法全書

堀田航盛館

M39

BBC－0523